

## 記録を通して子どもを理解するには

### 1 知能・言語活動

一般に、知能の高い子どもは、ことばが早く発達する。しかし、ことばの発達がおくれているからといって、必ずしも知能が低いとは限らない。ふつうの子どもなら、

お茶の水女子大学  
小 口 忠 彦

わたくしは、以前、評価に関して、その基準をA・B・C三段階に区分するのはよいとしても、各々を、クラス全体の子どものうちの何人と機械的に人数で決める評価の仕方に疑問をいただき、環境の変化によつても

てあれば、子どもを理解するために役立つが、ふつうの記録だけで子どもを理解しようとすることは、早計であろう。ふつうの記録には、その限界というものがあることを、常に考えている必要がある。

また、記録には、行動観察の記録の他に、知能の記録、家庭環境調査の記録などがあり、成長しつつある子どもを理解するためには、これらの記録を総合的に活用する必要がある。

ましくないものならばC、環境の変化によつて、よくも悪くなる不安定なものに対してはB、とするのがよくなきかと、述べたことがある。記録が問題になるのは、主として、評価がBの段階の子どもを理解する場合である。*(臨界観察)*の記録がとつ

だしてみよう。

次に、知能・情緒・社会性などに関しても、大切なことがらのいくつかを、ひろい

ここで、知能についての記録で、注意すべきことを述べておこう。知能テストには、ことばのよく話せる子どもにとって有

利なA式と、ことばを使わずに答えられるB式との二種類がある。知能についての記録をみる場合に、A式、B式、いずれのテストによるものであるかを、たしかめておかなければならない。というのは、いま、年齢の割合に、大へんよく話せる子どもがいるとする。A式のテストを受けさせた結果、予想通り知能指数も高かつた。しかし、B式的テストを受けさせた結果は、思わしくない、というように、双方のテスト間でクイズガイを生じる場合があるからである。A式、B式的双方を受けさせることの場合には、何式であるかが記録に明記されているようでありたいものだ。

2 知能・質問

幼児期のはじめには、意味をもつた音声、特に擬音語が、そのまま話すことばかりであるが、一歳半から二歳までの間で、二語、あるいは数語を連ねた多数語文を用い

B式との二種類がある。知能についての記録をみると、A式、B式、いずれのテストによるものであるかを、たしかめておかなければならない。というのは、いま、年齢の割合に、大へんよく話せる子どもがいるとする。A式のテストを受けさせた結果、予想通り知能指数も高かつた。しかし、B式のテストを受けさせた結果は、思わしくない、というように、双方のテスト間でクイチガイを生じる場合があるからである。A式、B式の双方を受けさせることが望ましいが、一方のテストを受けさせる場合には、何式であるかが記録に明記されているようでありたいのだ。

るようになる。二歳以後、思想感情を表現できるようになると、子どもは興味をいくつ対象に関連して、盛んに質問する時期を迎える。この時期が、いわゆる「質問期」である。質問期は、二歳と三歳の間ごろからはじまり、六歳ごろで頂点にたつする、といわれている。子どもの質問は、初めは何をみても「これなあに」「あれなあに」と、たて続けに発する。しかし、三歳ごろになると、「何」という質問であったのが、「どうして」という理由をたずねる質問に移行する。この種の質問になると、ものごとを関係的にみるようになり、アタマが働いていられるのであるから、知能と関係があると考えられる。この種の質問が、いつ、どのよう

3 模倣・反抗

3 模倣・反抗

（模倣）、（反抗）は、他の子どもやおとなとの接触の結果現われた、社会的行動である。模倣は、人のやることは自分にもできる。そうだ、という気持があつて、他の人と同じようにすることである。反抗は、模倣とは対称的な行動である。反抗は、二歳ころに始まり、四歳ころで頂点にたつする。この時期が、いわゆる（第一反抗期）である。五、六歳以後、この傾向は次第に減少する。模倣が他の人と同じように行動することであるのに対し、反抗は、自分の通りにものごとを通そうとして、大人の要求・命令・権威などに抵抗を示す行動で、強情とか、拒否となって現われる。模倣といふが、ここばによる自己表現の一形式で、対人関係における子どもの（自我）の芽生えを読みとることができる。

反抗は、全く関係がないようでいて、実

は、根は同じものである。つまり、子ども

に芽生えてきた自我が、別々のかたちをとつて現わされたものにすぎない。三歳ごろからみられる「競争」にしても、「へんかく」にしても、他のものよりすぐれたり、あるいは、自分の所有権をたれからも侵害されたくないという傾向に基づいており、やはり、自我の拡張の現われであるとみられること。

観察記録は、外部に現われた子どもの行動の記録であるから、記録を理解のための手がかりとして用いる際、その受けとり方に注意したい。

とりわけ反抗については、たとえ記録に反抗的と記されていようと、この年齢の子どもでは、反抗的であるのが発達段階からいつて、ふつうの状態であり、反抗するからといって、この時期に反抗を余り強く抑えると、青年期になって、意志薄弱になることがある。

#### 4 情緒・社会性

子どもは、自分と自分以外のものとを混同し、主観的要求が主となることが多いけれど、それでも、自分を他に適応させてゆくことを学び始める。そして、ある程度、時間を延期することも、また、ガマンする

といふこともできるようになる。「情緒」の発達は、「社会性」と深いつながりをもつ。精神分析でいう「固着」は、そのよい例であろう。固着とは、失敗することや、いじめられることを恐れて仲間から回避し、そのためには情緒の発達が未発達のままに止まっていることである。

一般に、この時期の子どもの友人関係は、年齢とともに広くなる。仲間と一緒にあそび、お互に話す、あそび友だちを求めるようになる。人数は、三歳では二人くらいであったのが、六歳になると、三、四人になる。しかし、三、四人になると、集団は二つに分かれがちではあるが。

子どもの社会性の欠除は、家庭における

あまやかしが原因である場合が、比較的に多い。一人子、長男、長女というのは、概して社交性が乏しいものである。家庭環境調査の記録は、このような場合、子どもの理解に手がかりを与えてくれる。記録をよむ際、情緒の発達、社会性の記録を関係づけてみると、また、家庭環境調査の記録をもこれらと関連させてみると、子どもを理解する上に、忘れてはならないことであろう。

#### 5 創造性

子どもの「創造性」が現われやすいのは、あそびにおいてであろう。あそびの型は、感官を使ったり、手足を動かしたりする機能あそび、何かのまねをして想像の世界で楽しむ、いわゆる「こつこあそび」、自分で作ったり、描いたりする「構成あそび」を見たり、聞いたりすることを楽しむ「受容あそび」に分けられる。あそびは、年

齡とともに変化する。これらのうち、構成あそびは、一番高度なあそびと考えていいと思う。しかし、その構成あそびにも、多分に想像が混入している。この想像性を、すぐさま創造性とみることは、さけた方がいいように思う。創造性は、表面的な風変りということではない。子どもが変わったやり方をする。そのやり方が、少くとも、子どもの過去にみられなかつた方法であり、しかも、子ども自身が、はつきりした意図をもつ場合についていえることがある。

創造性を記録から読みとるためには、継続観察の記録に頼らなければならない。

## 6 基本的習慣

三歳から五歳——この時期は、運動神経が発達し、かなり複雑な行動が可能である。ことばを使って自由に話もできる。だから、やらせればいろいろのことができるはずである。

基本的習慣としての、睡眠・食事・用便・着衣・清潔に関する基礎的なことは、このくらいの年齢なら、身についていなければならないことであるから、どの程度ですぐさま創造性とみることは、さけた方がいい。例えれば、

睡眠……きまつた時刻にねる。よくねむる。一人でねる。

食事……好ききらい。一人で食事する。

あそびながらたべる。間食。

用便……一人でできる。用便のときは教える。長くがまんする。便通。

着衣……ボタンをはめる。くつ下をはいでできる。きちっときる。

たりぬいだりする。洋服を一人

清潔……お便所へいった後で手を洗う。

食事の前に手を洗う。はをみがく。

など。

ここにあげたのは、一例にすぎないが、

子どもの生活の面で、ここにあげたくらい

の項目については、記録から読みとつておきたい。その他、道路の右側を歩くこと、道路の横断、車中の行動など、ぜひとも習慣づけなければならないことが、数々ある。

子どものパーソナリティは、日々の生活を通して形成されていく。子どもを正しく理解するためには、生活のあらゆる面の記録を総合してみなければならない。そして、記録する場合、臨界觀察にしても、他の形式によるものであっても、少くとも、ここにあげたくらいの項目が読みとれるよう記録される必要があると思う。

